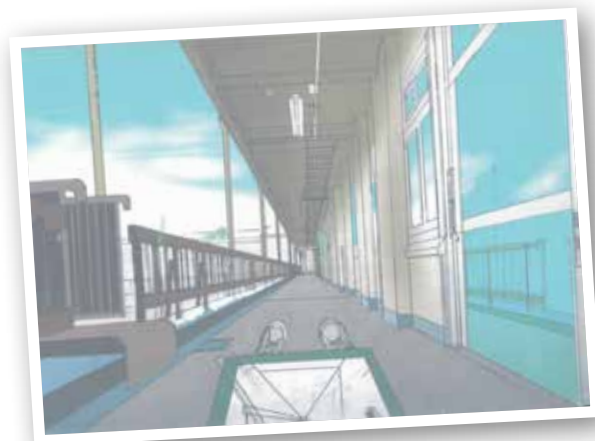


図書館だより

Library News No.79

National Institute of Technology (KOSEN) , Nara College

2022年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙画像は、1S 仙入 汐夏さん(左上)、1I 竹内 将也さん(右上)
1M 久保 海渡さん(左下)、1E 森 琴音さん(右下)の作品

目 次

巻頭言	2
クラス・個人多読・読書感想文コンクール表彰について	3
読書感想文コンクールを終えて	4
読書感想文コンクール入賞作品	6
学生図書委員会 活動報告ほか	12
図書委員厳選おすすめ図書紹介	15

巻 頭 言

本との再会

情報工学科 松 村 寿 枝

本について何かを書こうと思ったとき、そういえば、最近ゆっくり本を読んだことが無いなということに気が付きました。時間がないとかいろいろな理由をつけて読んでいないこともありますが、高校生や大学生だったころあるいはもっと前の小中学生のころから結構、本を読んでいた気がします。それでは、学生の皆さんと同じ年のころはどんな本を読んでいたのだろうと思い出してみました。当時は、電子書籍なんてないので、文庫本やハードカバーと呼ばれる本を読んでいた。ただ、毎回購入してはもったいないので、近くにあった県立図書館、市立図書館、学校の図書館それぞれで借りてきて読んでいました。今と違って、時間はあるほうだったので、ライトノベルのような優しいものから、ちょっと難しいものを背伸びして読んでいました。丸山圭三郎や宮本輝、谷崎潤一郎、田辺聖子、栗本薫、村上春樹、高橋源一郎など読んだのもこのころです。また、当時ベストセラーとなった本の何冊かは入手して読みました。その時は、ベストセラーになった本に対しても、特に感銘を受けるでもなく、ただただ、読んでおいた方がいいだろうというノルマのように読んでいました。

ところが先日部屋の片づけをしていた時に高校生当時読んでいた本がいくつか出てきました。ハードカバーですし、当時としてはお小遣いをはたいて買ったものなので処分せずにとっていたものですが、今回、処分をするつもりで最後に読んでみようと思い取りました。高校生の頃は、何も感じなかったはずなのに、「なるほど、ここに書かれていることはこういう意味だったんだ」と登場人物の心象風景、心理描写が手に取るようにわかりました。20年以上の時を経て、本と再会した…まさにそのような感覚です。この感覚を本との再会と名付けてみたくなりました。それでは、当時は大好きでよく読んでいた作家の本も今ではほとんど読むこともなくなりました。これは本との別れでしょうか。

本の感想、受け取り方は、読む人の心の成長によっても変わってくるものだと思います。ぜひ、これから皆さんは、たくさん本を読んでください。そして、20年は大袈裟ですが、何年か後にまた読んでみてください。違った感想を持つと思います。それが本との再会です。その時には、今とは違った読み方ができる新しい発見があります。皆さんもぜひそのような体験を試してみたいと思います。そして、私は、当時、挫折をしてしまい、本棚に眠っているロシア文学の1つにチャレンジしてみたいと思います。

クラス・個人多読・ 読書感想文コンクール表彰について

【クラス多読表彰】

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書の購入ができる権利を贈りました。



第1位	システム創成工学専攻 電気電子システムコース1年	(16冊／人)
第2位	機械工学科4年	(13冊／人)
第2位	物質化学工学科3年	(13冊／人)
第4位	物質化学工学科4年	(9冊／人)
第5位	電気工学科4年	(8冊／人)

【個人多読表彰】

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

第1位	物質化学工学科3年	山口三佳さん	第6位	電気工学科1年	木村要一さん
第2位	電子制御工学科3年	阪本靖大さん	第7位	システム創成工学専攻 電気電子システムコース1年	吉村勇人さん
第3位	(非公表)		第8位	物質化学工学科4年	谷本朱美さん
第4位	物質化学工学科3年	竹下昂琉さん	第8位	物質化学工学科3年	川嶋相良さん
第5位	情報工学科5年	二ツ井克空さん	第10位	電子制御工学科4年	アドリアンさん

【読書感想文コンクール表彰】

表彰式は1月5日(水)昼休みに校長室にて行われました。



令和3年度

読書感想文コンクールを終えて

毎年行われてきた本校の読書感想文コンクールですが、昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となりましたが、今年は無事に第45回を迎えることができました。応募作品は1年生192編、2年生203編、3年生7編、合計402編ありました。その中から、教育支援センター運営委員会の教員10名と国語科の教員3名が慎重に選考し、次のように6名の入選作を決定しました。この結果については、1月5日の全校集会でもお知らせしましたが、以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、栄誉を称えたいと思います。

また、惜しくも入選とはならなかったものの、選考の過程で佳作として特に優れた評価を得た24名の学生も併せて紹介します。

最優秀賞

情報工学科3年 杉山 咲 「幸せな結末」とは

優秀賞

情報工学科3年	石村 涼介	徹底的な美の追求
物質化学工学科2年	寺田 歩生	「ジュラシック・パーク」を彩った描写たち
機械工学科1年	橋本 琳	親と子供の価値
情報工学科1年	鄭 佳音	平凡と非凡
物質化学工学科1年	原田 綾音	河童の目で - 「河童」を読んで -

佳作

1 M 石田 眞子	1 S 馬場 光希	2 E 小川 弘登	2 I 片岡 春陽
1 M 南崎 壽伸	1 I 水原 純	2 E 北田 恵裕	2 I 玉垣 勾瀉
1 E 岡野 響	1 C 安養寺伶央	2 E 長辻 彩花	2 C 藤井 陽
1 E 木村 要一	2 M 桑原 幸汰	2 S 滝澤 嶺真	(非 公 表)
1 E 松永 真輝	2 M 田丸涼太郎	2 S 前村 峻斗	3 I 井原 実咲
1 S 安藤耕太郎	2 M 中嶋 勇介	2 S 宮野 博雅	3 C 原 朱眸

《最優秀賞について》

3 I 杉山咲さんは、川村元気「世界から猫が消えたなら」を読んで書いています。杉山さんは、簡潔に話の全体を紹介すると、すぐに本題の「思い出」に焦点を当て、そこから自分自身の記憶へとつなぎます。そして主人公と比較し、今の自分が置かれた状況を捉え直します。主人公にとっての「思い出」が果たす役割を読み解き、その人の個性だけでなく将来の進路にさえ寄り添うことになるモノたちにも留意しています。様々な記憶とふれあい直すことで限られた余命に絶望することしかできなかった主人公が、死と折り合いをつけていく姿から、杉山さんはもう一度自分の生を、自身の周りのモノたちを見つめ直します。そして、人生のいちばん近くにいる幸せにつないでくれる大切なものを再発見しています。結びまで淀みなく、時そのものを感じるような思いで読みました。

《優秀賞について》

3 I 石村涼介さんは、川端康成「雪国」を読んで書いています。石村さんは、作者の描く世界の美しさとその表現上の工夫に注意しています。まずは暗示的表現、「指」「トンネル」「汽車」「雪」などはすべて暗喩なのではないか、と石村さんは考えます。美の邪魔になりかねない明示的な性的表現を避けるための工夫としての、と。結末の「火事」についてもまた、情熱こそが身を滅ぼすことの暗喩なのだと。こうした作者の工夫について謎解きをするような読み方を大変興味深く思いました。

2 C 寺田歩生さんは、クライトン「ジュラシック・パーク」を読んで書いています。映画から原作へと遡っただけでなく、中学時代はテーマに注目して読んでいたのを今回改めて描写とその細かさに注目して読み直しています。映画とのいちばんの違いである言葉、寺田さんはとくにその精密描写に魅せられて具体的に表現を拾っていきます。その緻密な手つきは、マイナーであれ創作であれ「登場させなくても全く問題ない恐竜」など一頭たりともいないことを知っている者の真骨頂ともいえるでしょう。

1 M 橋本琳さんは、太宰治「桜桃」を読んで書いています。「子供より親が大事、と思いたい」という言葉をめぐって、どうしてその言葉に引っかかりを覚えるのか、作者と主人公「私」を重ねながら自分自身の問題としても考え、夫婦や親子のあいだにある心の機微を読み解いていきます。引け目、罪悪感、気まずさ、自己防衛。最後に橋本さんらしい独自の解答が提示されているのも、高い評価の一因となったと思います。

1 I 鄭佳音さんは、ドストエフスキー「罪と罰」を読んで書いています。殺人を犯した者の罪の意識について、また凡人と非凡人を分ける選民思想について考えた鄭さんは、非凡人であれ罪は免れないと考えたこと自体が、自分が凡人である証拠だと思っています。また、自分は非凡人だと主張する凡人にすぎないことを認めざるを得ない主人公の絶望にまで思いやります。この名作・大作に真っ直ぐに向かい合おうとした果敢な姿勢が文章からにじみ出ています。

1 C 原田綾音さんは、芥川龍之介「河童」を読んで書いています。河童の国と人間の国との違い。餓死や自殺のない世界は感傷のない世界であり、おなかの中の赤ちゃんは生まれてきたいかどうかを尋ねられ、その気がなければ生まれないですむような世界でもあります。どちらも「完全に正しい」とは思えない原田さんは、人間社会やその常識について「時々一度立ち止まって、河童の目で見つめ直」してみようと思う、と結んでいます。

《全ての学生に向けて》

コンクールに参加してくれた皆さん、大変お疲れ様でした。ドキュメンタリーであれフィクションであれ、それが改めて作られた「作品」となったものに対して、私たちはときに実世界に対して以上に心を動かされたりします。そしてその感動を誰かと共有できたらと願うときに、それをたとえば言葉にしてみたいと思うのではないのでしょうか。その作品と自分はどうか絡んだのか。書くことは話すことほど簡単ではないかもしれませんが、書いたものを読み直し、推敲し、清書する流れの中で、皆さんが感じ、思い、考えたことが、きっと自分でもより明確になってくると思います。

来年度のコンクールも今年度以上の主体的な応募による力作を期待しています。 (国語科・武田)

読書感想文コンクール入賞作品

最優秀賞

『世界から猫が消えたなら』 川村元気 著

「幸せな結末」とは

情報工学科3年 杉山 咲

この本は、癌で余命僅かな主人公が、悪魔との取引で命を得る、一週間の物語だ。取引とは、「世界から何か一つ消す代わりに、一日生き延びることができる」というもの。電話、映画、そして時計。一日を重ねる毎に、当たり前にあったモノがない世界に変わっていく。

主人公は最終的に、猫を消さず、自分が死ぬことを選択する。その後の、主人公が身辺整理をしている場面。彼は、父からもらった切手を集めた箱を見つける。そこから、父との思い出が語られる。私は、読みながら、小さいときのことを思い出していた。キラキラしたプリキュアのシールを、何枚もランドセルのポケットに入れて、ずっと持ち歩いていたこと。女の子が魔法で可愛い洋服を作る絵本に憧れて、何度も何度も読んでいたこと。今となってはどこにあるかさえもわからなくなってしまったが、確かに彼らのことが大好きだった。幼い頃持っていたモノはみんな宝物で、今なら気付きさえしないようなガラクタでさえも、かけがえのない憧れだったはずだ。普段画面ばかり見ているから気付いていないだけで、今も変わらずそばにあるのだろうか。小さな身体で走り回る世界は、今よりも狭かったかもしれない。しかし、その世界は解像度も彩度も今より高く、とても輝いていたと思う。

本を読みながら取り戻した失くしかけの記憶は、とても素晴らしいものだった。それに対して、今の私はどうだろうか。将来の夢への具体的な手段を知った代わりに、夢を実現させることへのハードルの高さを理解してしまった。自分でできることが増えていく度に、将来への純粋な憧れが色褪せていく気がする。なんだか、思い出の自分とはもう違うのかと、心寂しくなってしまう。

それでも、思い出は自分の基盤として生きているのだと思う。主人公がいざモノを消そうというとき、必ず連鎖するように思い出が出てきた。周りのモノたちが、人との繋がりの中になっていて、「自分」というものを形作ってくれていたのだと、気付かされていた。それは多分、誰にとってもそうなのだ。世の中に溢れる程あるモノの一つ一つは、間接的であっても、何らかの形で誰かの人生を彩っている。人同士の関わりの中で、自分の人生の傍らで、寄り添ってくれるのが、モノなのだろう。そして、それらは将来の進路に影響したり、自分の感性の末端に、個性として表れていたりするのかもしれない。無意識のうちに、私の一部として、生きているのだろう。

「その死が幸せか不幸せかということは、どう生きたかということに関連する」。これは、主人公の言葉だ。最初は死にたくないと絶望していた主人公が、自分の人生の中にあったモノに触れ、思い出を振り返ることで、生と死にゆるやかに折り合いをつけていく。その中には、幸せな記憶もあれば、後悔として心の傷を抉るような記憶もあった。もしも、私が彼の立場になったとしたら。果たして私は、人生に幸福な諦めを付けられるのだろうか。幼い頃抱いていた未来への羨望に、折り合いを付けられるのだろうか。これまで過ごしてきた中で、向き合いたくない後悔も、直したいところも沢山ある。これからの人生を考えれば、なおさらだ。私の周りのモノたちが、自分をどう形作っていくのかはわからない。それでも、沢山のモノに触れて、自分だけの世界を彩っていったなら、それはきっと、将来の自分の幸せに繋がるはずだ。そしてもしも、主人公のように、命と引き換えてでも守りたいモノができたのなら、その人生は素晴らしく尊いものだと、胸を張って言えるだろう。

この本を読んだ後、人生の結末において最も近くにいてくれるのは、思い出なのだと思う。モノによって彩られたその思い出を、最後に誇ることができたのならば、それは幸せな結末だろう。

優秀賞

『雪国』 川端康成 著

徹底的な美の追求

情報工学科3年 石村 涼介

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」。これほど有名な書き出しは後にも先にもまずないだろう。しかし、その後の展開を知る人は少ない。夏季休業中という季節感とかけ離れた「雪国」の二文字は、私の心を動かすに十分な迫力を放っていた。そして、その内容は身震いするほどの美しさと工夫に溢れていた。

主人公の島村は、雪深い温泉街で芸者・駒子と出会う。二人は惹かれ合いながらも進展はせず、もどかしい愛の様子が美しい景色と共に描かれてゆく。

まずこの物語に感じるのは、大きな展開がなく、二人を中心とした温泉街の日常が描かれることだ。主役の二人にはそれぞれ近しい異性がいるが、三角関係に発展するでもなく、大きな修羅場も訪れない。このことから、著者は人の汚い部分や卑しい部分を極力省き、美しさのみを描きたかったのだと考える。

現に、著者は性に関わる場面を暗示的に表現している。例えば「あんなこと」と述べたり、『『こいつが一番よく君を覚えていたよ。』と、人差し指だけ伸ばした左手の握り拳を、いきなり女の目の前に突き付けた』と述べたりしている。これは、性と愛は切り離せないと理解した上で、美の邪魔にならないような工夫だといえる。この視点をもって改めて本書の書き出しを見ると、これは「トンネル」と「汽車」、そして白い「雪国」を用いた暗喩だと捉えることもできよう。

また、本作ではその幕切れも印象深いものである。二人の別れを暗示する描写がある中で、物語は火事の場面で唐突に終了する。しかも、火事の予後は描かれず、まさに倉が燃えている状態での幕切れである。ここから私は筆者の意図を二つ汲み取った。一つは、この火事も暗喩だということだ。二人の愛が高まる中で、いつかその情熱は身を滅ぼすということを最終場面で暗示し、二人の行く末を描き切ったのだと考える。もう一つは、物語を美しいまま終わらせたかったということだ。前述した通り、本作は美しさに重きを置いている。したがって、二人が不幸になる前に、倉が焼け落ちて灰になる前に物語を終わらせたかったのだろう。

このように、本作は人と景色の美しさを追求し、完成された物語である。そして、美の追求にあたっては大きな物語の起伏を作らず、相反する描写には暗喩を施し、終わり方にも工夫を凝らすといった著者の強いこだわりが感じられた。日常の美しさを感じながら読むも一興、暗示の意味や二人の行く末を想像しながら読むもまた一興だろう。本作以外にも数々の名作を遺した川端康成氏の作品を他にも読みたいと心から思う。

『ジュラシック・パーク』 マイクル・クライトン 著

「ジュラシック・パーク」を彩った描写たち

物質化学工学科2年 寺田 歩生

一九九三年、スピルバーグの手により制作された映画「ジュラシック・パーク」。アニマトロニクスとコンピュータ・グラフィックスを駆使して描かれた、触れることさえできそうな恐竜たちの姿には誰もが心を躍らせたことであろう。私も迫力ある恐竜たちの姿に惹かれた一人であった。そのため自分にとって「ジュラシック・パーク」は素晴らしい映画という印象しかなかったが、中学生の頃原作があることを知り、古本屋で購入して読み込んだ記憶がある。当時は著者の独特な科学観、発達していく技術への警鐘など、物語のテーマに注目して読んでいた。しかし今になって読み返してみると、その描写の緻密さには目を見張るものがあると気づく。高度な社会風刺作品と見られがちなこの小説だが、私はあえて描写、そしてその細かさに着目してみたいと思う。

この物語の舞台は、遺伝子工学の力で蘇った恐竜たちの、動物園ならぬ恐竜園「ジュラシック・パーク」である。様々な専門家たちが視察のためコスタリカ沖の孤島に造られた「パーク」へ招かれ、ある事件が起きて脱走した恐竜たちに襲われる、というのが物語のあらすじだ。だが、物語は孤島ではなく中米コスタリカの診療所から始まる。恐竜がたくさん出てくる映画版のような展開を期待していた読者にとっては拍子抜けという感じであるが、次第にその緊迫感に魅了され、この場面が小説の世界に没入するきっかけとなるのだ。診療所に、恐竜に襲われた少年が運ばれてくるというこの場面の一連の描写、例えば「腐臭を思わせる、死と腐敗のにおい」「傷口にこびりつくねばねばした泡」には、実体験を描いたかのような細かさが見られる。私がまず惹かれたのは、このぞっとする場面をこれほど細かく描きながらも、くどさを感じさせないところであった。このような精密な描写は物語を通して続き、それが読者に次の頁が読みたと思わせる一因となっている。

物語の主軸は手に負えないような技術を発達させていくことへの危機感にあるが、この作品では、それを作者の意図を読者に伝える媒体でしかないともいえる「恐竜」の描写にも抜かりない。「フクロウを思わせる、ホウホウというおだやかな啼き声」「体長は三メートル強、黄色い体表が黒い斑紋に覆われ、頭にはV字型の赤いとさがついている。」これらは肉食恐竜ティロフォサウルスについての描写である。ティロフォサウルスの名を聞いてその姿が浮かぶという人は少ないだろう。つまり登場させなくても全く問題ない恐竜なのだ。これ以外にも、オスニエリアやヒプシロフォドンなど非常に知名度の低い恐竜が出てくるが、それらの描写は非常に緻密で創作ではあるが恐竜図鑑での姿よりも生き生きとしているとさえ思う。マイナーな恐竜でも描写を怠らないその描き方に恐竜マニアの私は感動を覚えた。コナン・ドイルの「失われた世界」などでただただ恐ろしい化け物として描かれてきた恐竜は、「ジュラシック・パーク」で遂に命を手にしたのである。

この小説に、暴走する科学技術の中で生きる我々現代人への警鐘を見た、という感想はよく見かける。しかし作者マイクル・クライトンの、創作だと高を括らず、主題とは関係のないようなところも含め精密に描写する真摯な姿勢にこそ学ぶところがあると私は思う。現代社会への警鐘という鋭い主題よりも、物語の各所に散りばめられた細かい描写、その元となる作者の情熱が、映画も含めたこの作品を不朽の名作たらしめているのだと実感した。

『桜桃』 太宰治 著

親と子供の価値

機械工学科1年 橋本 琳

「子供より親が大事、と思いたい。」、この言葉が『桜桃』を読了した後、ずっと私の頭の中で渦巻いている。『桜桃』では冒頭と最後で「私」が二回も「虚勢みたいに呟く」のである。

『桜桃』は太宰治の実際の家族をモデルにして書かれたとも言われている。主人公の「私」は、子育てや家事に一切関与しない人物で、妻にすべて任せていた。そして極端な小心者であるため、家庭での気まぐさに堪えられずいつも冗談を言いながら過ごし、小説家としてもへどもどしながら書いている。「私」と妻は互いに機嫌を損なわないように相手に合わせ、言い争いさえした事さえ無いような夫婦だった。しかし、あるとき、妻の不満が爆発し二人は口論になってしまう。その後、妻が外出するため、「私」は家で子供達の面倒をみないといけなかったが、「私」は妻と子供達を残して家を出てしまう。逃げた「私」は酒場にいる女友達が出してくれた桜桃を極めてまずそうに食べたのであった。

「子供より親が大事、と思いたい。」がずっと私から離れない理由は、私がまだ子供だからなのかもしれない。子供は心のどこかで親に大事にされて当たり前だと思っているのではないだろうか。実際に私自身もそう思っているし、親になってもその考えは変わらないと思う。親から生まれる子供を大事にしないのは無責任だと思うからだ。しかし「私」、すなわち太宰は違う。「虚勢みたいに呟く」のは自分の弱さを隠すためだと考える。子供が大事、と思いたいのが仕事も上手くいかず、ヤケ酒に浸るぐらい自分のことで精一杯だった太宰には子供より親が弱い存在に見えたのだろう。『桜桃』を発表した当時、太宰には七歳の長女、四歳のダウン症の長男、一歳の次女がいた。作中にも登場しているのだが、長男は原因不明の病気で「私」はそれを発育が遅れているだけであってほしいと願っていた。この頃はまだダウン症というものが正式になかったため、長男が未知の病気にかかっているかもしれない不安が余計に太宰の心を揺さぶったのではないだろうか。このようなことを考えていくと、最初は「私」や太宰を自分のことしか考えず亭主失格だと思っていたが、親としての引け目を感じていて、尚且つこの時代では妻が家のことをすることが当然だということに育児や家事を一切しないことに罪悪感を覚えていることから、当時にはない現代的な考えができていた人なのだなと思った。

桜桃を極めてまずそうに食べたのはどうしてだろうか。私は、そこにも親としての引け目があったからではないかと思う。桜桃を食べたことがない子供に持って帰ってあげたいが、家を飛び出し、妻に負担をかけているというのに子供に桜桃を渡しても堪えられない気まぐさが夫婦間に漂う気がしてしまう。だから、ヤケ酒をするように弱い自分を自己防衛するため、本意ではなく桜桃を食べたのではと考える。

『桜桃』を読み解いていくうちに、親と子供どちらが大事か、ではなく、どちらも大事で親も自分の身を削ってまで子供を大事にする必要はないのではないかと思えた。確かに子供が成長するまで大事にして守ってあげることも親としての責任だと思っている。しかし、本当に幸せな家庭というのは両者が等しく大事にされている家庭を指すだろう。だから、大事に育ててくれた母のことを私ももっと大事にしないといけないなと思った。そのような大切なことに気づかせてくれた『桜桃』を読んでよかった。

『罪と罰』 フョードル・ドストエフスキー 著 工藤精一郎 訳

平凡と非凡

情報工学科1年 鄭 佳音

ラスコーリニコフが、人を殺した。ラスコーリニコフは元学生だった。人は、高利貸しの老婆であった。

筆者ドストエフスキーによる「罪と罰」を読んだ。主人公の名はロジオン・ロマーヌイチ・ラスコーリニコフ。母と妹をもつ元大学生である。彼にはある思想があった。すべての人は凡人と非凡人に区別され、選ばれた非凡人は、新たな発見、世の中の成長のためであるならば、社会道徳を踏み外す権利を持つ。そして自分も、その非凡人のうちの一人だと。そして彼は人を殺した。殺したのは高利貸しの老婆アリョーナ・イワーノヴナ、更に、彼女の妹リザヴェータ・イワーノヴナである。アリョーナの殺害が計画的だったのに対し、リザヴェータのそれは全くの偶然であった。アリョーナの現場を、彼女に目撃されてしまったのである。こうしてラスコーリニコフは一晩の内に二人も殺した。予期していなかった殺人もあった。偶然にも完全犯罪を成し得た彼に待っていたのは、深く重い罪の意識だった。

さて、先程述べた思想は、彼が大学生だったときに論文として書いたものだ。つまりこの考えは元来より彼の根本にあるものであり、殺害理由は全く別のところにあるのである。彼は、一つの微細な罪悪は百の善行に償われるという理論のもとに、それを実行した。このところでいう罪悪は老婆の殺害、百の善行は老婆によって苦しむ人たちの解放である。事実、老婆に苦しんでいる人は少なくなかった上、彼もそのうちの一人であった。しかしその晩になると彼は心優しきリザヴェータまで殺しているではないか。そうならば彼を救ってくれるのは彼の根本にある思想、つまり、一番初めに述べた思想だけだったのである。

私はこの、彼の思想について述べていきたい。結論から言おう。私は反対である。というか、反対せざるを得ないのだ。彼の思想を整理すると、人は凡人と非凡人に区別される、非凡人は世の中の成長のためなら罪を犯す権利を持つという、この二つである。もし仮に、人が平凡と非凡に区別されるとしよう。そうならば、次に自身がどちらかを考えなければならなくなる。非凡人であれば、罪は許されるのか。そんな訳がないだろう。私は真っ先にそう考えた。しかし、この考えこそが私を平凡たらしめる考えなのではないか、私はやはり平凡に区別されるのではないか、とも思ったのだ。自らが平凡だと知った今、非凡に殺されることを許すはずもない。つまり、私は反対する他ないのだ。しかしこの本の面白いところは、ラスコーリニコフが自らを非凡の側の人間であると主張するのである。だからアリョーナも、リザヴェータも、彼の中では仕方がないになるのだ。読んでいて、彼の考え方に共感を寄せる箇所がいくつもある。痛々しい感情を抱え、狂ったような言動さえも彼に共感してしまう。結局彼自身は、選ばれた非凡人だと主張するただの凡人に成り下がる。そのことを彼自身も察してくるのだ。そのときの彼の絶望ははかりしれないのだろう。

もし、人が平凡と非凡に区別されるのであれば、私は間違いなく平凡だろう。しかし中にはラスコーリニコフのように、非凡であると信じる仕方がない平凡もいるのだ。平凡も平凡の中で考え、伝え、信じ、裏切られ、それでも彼に共感を寄せ、面白いと感じてしまう。つまるところ、私も非凡人であると夢見る仕方がない凡人のうちの一人なのだ。

『河童』 芥川龍之介 著

河童の目で 「河童」を読んでー

物質化学工学科1年 原田 綾音

芥川龍之介が望んだのは、河童の国のような世界だったのだろうか。河童の国は人間の国とは全く違う。出産、遺伝、恋愛、検閲、法律、宗教…。人間社会に存在する様々な要素は、河童社会にも存在する。ただ、それらに対しての捉え方が両者で異なる。真逆と言ってもいいほどだ。人間社会で生きているせいか、私は初め、河童社会での常識が正常には思えなかった。しかし、河童達の言い分を聞いていると、妙に納得してしまった。私は芥川龍之介に河童の国を、彼が望んだかもしれない世界を納得させられた。

わたしが一番衝撃だったのは、河童の国の法律だ。河童の国には「職工屠殺法」が存在する。文明の進んだ河童の国では、新たな機械が続々と生まれ、人手の要らなくなった製造会社は職工を解雇する。解雇された大量の職工達は皆、有毒ガスで殺され、食用の肉になる。何て残酷で非人道的なのだろう、と最初は思った。しかし河童はこう言った。

餓死したり自殺したりする手数を国家的に省略してやるのですね。

あなたの国でも第四階級の娘たちは売笑婦になっているではありませんか？職工の肉を食うことなどに憤慨したりするのは感傷主義ですよ。

これを聞くと、やはり正義とは思えないが、どこか理に適っているように思ってしまう。私がこれを実際に言われたら、言い返せずに黙ってしまうだろう。

また、河童の子供は母親のお腹の中で、この世に生まれるか否かを選択することができる。人間の男は河童に産児制限の話をして、「両親の都合ばかり考えているのは可笑しい」と笑われた。人間は親が産むと決めたら生まれるし、産まないと決めたら生まれてくることができない。確かに子供は、親の都合に振り回されているようにも見える。産まないほうが将来の子供のためということもあるだろうが、それに子供の意見は本当に含まれているのだろうか。子供が生まれたいと思っていることはないのか。そう考えると、私は河童の言い分にも頷けてしまうのだ。

人間社会とかけ離れた河童社会は、人間から見るととても変に見えるだろう。でも、河童の目にも人間社会は変に映る。河童達の言葉を受け取った私の目は、人間より河童に近いものになってしまった。人間社会が完全に正しいとも、河童社会が完全に正しいとも思わない。しかし、芥川が河童の目を通して伝えた人間社会への批判には、考えさせられるものがある。人間社会の中に居て、常識を常識だと思い込み、それが正しいと思っていた私は、一度考えてみるということをしてこなかった。でも、この話を読んで人間とは真逆な河童の意見を聞くことで、芥川が投げかけた問題について考えることができた。人間社会にいる一人間としてではなく、人間社会の外にいる、河童としての視点で考えた。芥川はこの人間社会を、いつも河童の目で見ていたのだろうか。私には芥川のようにいつも河童の目を持つことはできない。でも、時々一度立ち止まって、河童の目で見つめ直すことをしようと思う。そうすれば、今までの常識が、全て正しいものではないと気付くことができるから。

学生図書委員会 活動報告ほか

娯楽と共に

図書委員会委員長 電気工学科5年 堀江 太成

フィクションと共に日々を過ごしてきた。普段得られない最高の体験を、刺激を得るために。映画、アニメ、音楽、本、ゲームなどどんな媒体であっても面白い作品は存在する。娯楽は必要不可欠なものではないが、人生を豊かにしてくれる要素であると思う。だから、探し続けたい。

作品との出会いはいつあるか分からない。僕が小説の面白さを知ったのは森博嗣の「すべてがFになる」を読んだ時だった。正確で無駄のない理系的な文体、建築物の構造に基づいた論理的な解決。夢のような不安定な世界の表現。天才たちが紡ぐこのミステリー作品を夢中になって読んだ記憶がある。本嫌いの僕がこの本に出会ったのは偶然だった。いつもなら目を向けることもしない筈の小説コーナーで、純白の表紙を纏った本作を見つけ足をとめた。曖昧で想像を掻き立てるタイトルに衝撃を受け、初めて小遣いで購入した。それから今に至るまで読書をしない日はなかったと言っても過言ではない。どこへ行こうとも本を持ち歩いている。人生が大きく変わった瞬間だろう。

本という作品媒体の魅力は抽象性にあると考える。読者によって映る景色は違う。しかし、物語は共通して動く。自分の好みに合わせた世界を見つつ、最高の物語を共有することができるのだ。それに加え、小説家たちの美しくも曖昧な言葉を知っていくことで想像力や感性は磨かれる。いつしかフィクションを超えて現実の景色の映り方まで変わっていく。これからの生活を豊かにしてくれることだろう。

言葉を知ることできっと実験レポートや就職活動でのエントリーシートなどで役に立つことが出てくる。そのためにとは言わないが、知っておくのも悪くないことだろう。

小説や映画などのエンターテインメントを楽しみつつ、言葉や物語を深く知っていくことでより面白みが増す。毎日が退屈だと感じている人がいれば是非何かしらのエンターテインメントに触れて欲しい。そして、深い所までもぐりこんで見て欲しい。得られるものはきっと大きい。

プロジェクト報告書

電気工学科5年 堀江 太成
電子制御工学科4年 山下 凜太郎

この場をお借りして今年度の学生図書委員会の活動報告をさせていただきます。委員会の活動で、学生が図書館を利用したいと思えるような企画をいくつもしてきました。今年度はブックハンティングと高専祭用の動画制作をしました。

新学期になり、委員会のメンバーが決定したのは良かったものの、委員会活動がオンラインでの音声通話が大半であったため、互いの顔を知らないままでの活動が約4か月に渡り行われました。

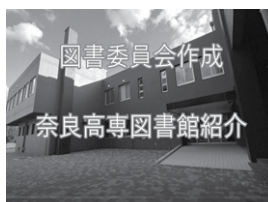
今年度の高専祭はコロナウイルスの影響に伴い、昨年に引き続きオンライン形式での開催となりました。昨年度を超えること、話題性があり図書委員会の名が少しでも多く行き渡る動画を制作することを最大の目標として高専祭プロジェクトの活動をしました。

対面での委員会活動を試みたものの、活動場所の制限やメンバーの都合により活動の進行は著しく遅滞してしまいました。図書に関連するものを他の出し物に匹敵または超えるような出し物に仕上げるという困難さや、圧倒的なネタや素材不足などの要因により、プロジェクトの進捗は足踏み状態になり、気が付けば高専祭開催まで間もない時期になってしまいました。

そこで私たちは会議を重ねた結果、エンタメ性があり、見終わった後に考えられる動画の制作を行うことにしました。前途多難な挑戦だったこともあり企画段階では意見が纏まりませんでした。“動画”という考え方に縛られていたことが一つの原因でした。

映像を上手く撮れない、構図を考えられないのであれば、思い切って“読み物”にしてやろうと画策しました。こうして高専祭用の動画が完成しました。メッセージ性の高い作品に仕上がったのではないのでしょうか。

最後に、今年度の学生図書委員会では図書館利用の促進を行うだけでなく、本や言葉の魅力を知ってもらいたいと考えております。これからも学生の勉学を手伝うだけでなく、学生の生活を豊かにできるような活動を行っていきたい所存でございます。是非、立ち寄るだけでも良いので気軽に図書館を利用してみてください。もしかすると素敵な本との出会いがあるかもしれません。



学生図書委員会作成 図書館紹介動画

図書館ホームページでは、学生図書委員会が作成した図書館紹介動画を公開しています。
自動貸出返却機の使い方などが説明されています。



広報プロジェクト活動内容

情報工学科5年 ニツ井 克空

皆さんこんにちは。

今年度の広報プロジェクトの活動報告をさせていただきますニツ井克空です。

さて、皆さんからすれば「図書委員会の広報プロジェクトってなにやっていたの?」と疑問に思われた方がおられるかもしれませんが、本年度の活動としては現在お読みいただいている図書館だよりに関する活動をいたしました。具体的には今年度図書委員会が行った活動の報告と読書感想文に関する執筆を行いました。

今回、図書館だよりを作成するうえで皆さんが図書館に行ってみたいと思えるような記事を書いてみました。具体的には、図書館を利用するにあたってどのような本を読んだらいいのかわからないといった点の解消方法として私たちが読書感想文を書き、それを皆さんに読んでいただき本の内容をつかんでもらい、実際に図書館で借りてみようと思えるような取り組みを行いました。1年生や2年生の方は校内読書感想文コンクールが実施されましたので、その感想文執筆を通して図書館を利用された方もいらっしゃるかもしれませんが、3年生以上の方に関してはレポートなどの課題で忙しくあまり読書に費やせるような時間がなくあまり利用されていない方もいらっしゃるのではないのでしょうか。もし、そのような方も本誌で掲載されている読書感想文を読んでいただき図書館に足を運ぶきっかけになれば幸いです。

当然、まだまだ図書館関連の広報としては不完全なものではあります。例えば現在では図書館だより以外の媒体での広報活動は行っていないので。何かしらの方法で図書館の情報について発信できれば良いなと考えております。

最後となりましたが、あと残り短い今年の図書委員会活動を頑張ってまいりたいと考えておりますので、今後も図書委員会をよろしくお願い申し上げます。

図書館だよりの表紙絵について

図書館だよりの表紙絵は、美術の授業の作品で教員から推薦された中から、教育支援センター運営委員会での投票により選出しています。

ホームページでは、候補作も含めすべての作品がご覧になれます。



同士少女よ、敵を撃て

逢坂冬馬著 電気工学科5年 堀江 太成

単射式ライフルを構え、T字照準器の向こうに人影をとらえる。敵はフリッツ(ドイツ兵)。凍えるような厳冬、吐いた息が白く舞い上がる。彼女は心を限りなく「空」にして引き金を引いた。

1941年6月22日ドイツ軍が独ソ不可侵条約を破って第二次世界大戦の第二幕、独ソ戦が始まった。1942年戦争が激化する最中、モスクワ近郊の農村で暮らす少女セラフィマの日常は突如として奪われる。ドイツ軍の食料の奪取を目的とした急襲によって、母や村人が惨殺されたのだ。自らも射殺される寸前、赤軍の女性兵士イリーナに救われ、そして問われる。

「戦いたいのか、死にたいのか」

セラフィマは戦うことを決意する。母を撃ったドイツ狙撃手と、母の遺体を焼き払ったイリーナに復讐するために。同様に家族を失った女性狙撃手とともにセラフィマは、モスクワ戦、900日にわたるレニングラード包囲戦、ソ連勝利への道を切り開いた第二次世界大戦最大の市街戦スターリングラード攻防戦に抛りこまれる。

国という単位で行われる戦争にとって、兵士とは国を形成する細胞のひとつかけらでしかない。愛国心に従いながら、生きていくために人を殺す。自らの肉体は生存本能の奴隷となり、本来の形を失っていく。そして、いつしか敵の“死”を以って“生”を得る兵士となるのだ。セラフィマも同様に戦場体験を重ねるたびに自らを失い冷徹になっていく。

なぜ戦うのか？

捕虜は痛ましい尋問の果てに惨殺され、女性一般市民は男性兵士の性的欲求の解消に利用される。形骸化された戦時国際法、理不尽な戦争の現実。

自分には何ができるのだろうか？

これは英雄譚などではない。復讐心に駆られ、狙撃手として参加した少女が血や泥にまみれた戦場で自らを探す物語である。女性だけの狙撃小隊での友情、仲間の喪失、逡巡。それらを体験した先にセラフィマが目撃した本当の“敵”とは。

単射式ライフルを構え、T字照準器の向こうに人影をとらえる。

敵は…。

同士少女よ、敵を撃て。



ブックハンティングについて

学生図書委員会の特に大きなイベントです。

年2回、各クラスで購入希望図書を募り、その図書を大阪の大型書店で購入する活動ですが、コロナ禍においてはオンラインで実施しています。1階奥にコーナーがあります。

本日は、お日柄もよく

原田マハ著

情報工学科1年

升岡 瑞葉

OL二宮こと葉は想いを寄せていた幼馴染の結婚式に参加し、退屈なスピーチに眠気を誘われスープ皿に顔を激突させてしまう。退屈なスピーチが続く中こと葉は伝説のスピーチライター久遠久美の衝撃的なスピーチと出会う。そのスピーチに心を動かされたこと葉は久美のもとに弟子入りする。久美のもとで経験を重ねることで、こと葉は「言葉の魅力」を知っていく…

言葉はとても大きなパワーを持っています。誰かにかけてもらった一言が大きな励みになったこと、誰かのスピーチを聞いて涙が溢れたことはありませんか。本作品ではそんな言葉の魅力について焦点が当てられています。とても丁寧に力強く物語が紡がれており、主人公こと葉が言葉に魅了されていくのと同時に、みなさんも物語に惹きこまれていくことでしょう。この本を読み終えたとき、ポカポカした気持ちに包まれ、そして、必ず言葉の魅力に取り憑かれていることと思います。

“困難に向かい合ったとき、もうだめだ、と思ったとき、想像してみるといい。三時間後の君、涙が止まっている。二十四時間後の君、涙は乾いている。二日後の君、顔を上げている。三日後の君、歩き出している”

これは本作品を初めて読んだ時からずっと、私の心に深く刻みこまれているフレーズです。物事が上手くいかなくて落ち込んでいるときにこの言葉を思い出しては「大丈夫。何とかなる」と私の心を支えてくれます。そして、その支えおかげで少し心が軽くなります。不思議なもので心が軽くなったら途端に物事が上手く進むようになったりします。

言葉というのはとても大きく大きな力を持っています。でも、だからこそ正しく使わないと人を傷つける武器にもなってしまいます。せっかくこんな豊かな表現方法を持っているのだから、誰かを傷つけたり悲しませたりするためではなく、世界をよりよくハッピーにするための力として言葉を発していきたいなと思います。

編集後記

図書館だより第79号に執筆いただいた皆様、ご寄稿ありがとうございました。

昨年度に引き続き今年度もコロナ禍で利用制限など、ご不便おかけしておりますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

(図書館)



奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

科学道100冊



科学道100冊とは国立研究開発法人理化学研究所等のプロジェクトにより選ばれた図書で名誉教授 宮本止戈雄先生より寄贈いただきました。1階奥に科学道100冊2019～2021をラインアップしています。